

令和元年6月22日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02806

研究課題名(和文) 現代日本語教育史研究のための情報リソースの構築 グローバルな視座の育成に向けて

研究課題名(英文) Building research source for modern history of Japanese teaching: Toward the cultivation of global viewpoint

研究代表者

小川 誉子美 (OGAWA, Yoshimi)

横浜国立大学・国際戦略推進機構・教授

研究者番号：50251773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語教育史研究の推進を目的に、主要なトピックや資料等をまとめ、研究情報のリソースの一つとしてウェブ上に公開した。内容は、1945年以降現代に至るまでの国内および海外の日本語教育の主要なトピックを地域毎に選定し、各トピックの先行研究などを掲載した。これにより、当分野を通時的、共時的に概観できるとともに、日本語教育に携わった先人の足跡をたどる作業を通じ、受講生の日本語教育史への関心を高めることに一定の効果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教育は、豊富な経験を活かしてグローバル社会の発展に貢献できる分野である。日本語教育の分野がその機能を果たすには、自らの歴史過程を学び、多様な事例の中で複眼的に時代を把握する力を養う必要がある。そのための受け皿として、文化庁によるガイドライン「日本語教員養成において必要とされている教育内容」が示す「日本語教育の歴史と現状」という領域があるが、日本語教育が注目される今日において、日本語教育学の学史にあたる科目を確立することは重要である。本研究は、当領域の次世代の研究の萌芽を育むとともに、研究のアウトリーチ活動を行うものである。

研究成果の概要(英文)：This research has summarized major topics and materials, etc., and has made them available on the Web as a resource of research information for the promotion of research on the history of Japanese language education. As content, we selected the main topics of Japanese language education in Japan and the world from 1945 to the present age by region, and listed the previous research of each topic. This will give a general overview of the field, as well as a synoptic overview, and will also have the effect of raising students' interest in the history of Japanese language education through the work of tracing the footsteps of the predecessors who participated in Japanese language education.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育史 現代史 ウェブ公開 研究リソース アウトリーチ活動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1946年以降を対象とする現代日本語教育史研究のための情報リソースをウェブ上で公開し、授業での実践を経て、その内容や成果を内外で報告するものである。研究開始当初には、次のような背景があった。

- (1) 歴史資料のデジタル化により、歴史研究は飛躍的に成果を生み出している。しかし、こうした最新の研究を用いて、日本語教員養成課程における「日本語教育の歴史と現状」という科目について再検討したり、研究の萌芽を育んだりしようという具体的な取り組みは報告されていない。
- (2) 日本語教育を社会的・歴史的文脈で扱う研究は、1945年以前のものが多く、それ以降の研究は、相対的に少ない。この時代の主なトピックを拾い調査研究を俯瞰しようという取組も報告されていない。
- (3) 前科研『日本語教育史のコンテンツの再構成と史料公開に関する基礎的研究』(課題番号24520572)では、当分野の研究を促すことを目的に、研究テーマのリソースを作成し、ウェブ上に日本語・英語・中国語の三言語で公開した。前科研では1945年までのテーマを扱い、1945年以前のみをウェブ上に公開している。

2. 研究の目的

本研究の目的は二つある。

- (1) 研究テーマや文献、資料など研究のリソースを作成し、前科研の成果と合わせて、ウェブ上に公開することである。そのリソースは、先行研究や資料等を示し、従来の研究が描いてきた日本語教育の史的展開をある程度俯瞰できるような構成にすること、日本語教育者をめざす者、従事する者が、社会的・通時的視野から日本語教育の研究に取り組むための研究情報のリソースを構築すること、受講生(大学院生)が本テーマに取り組み、内外の研究会への参加や発表を促すこと、を目的とする。
- (2) 上記のウェブサイトの内容や授業の実践に関し国内外で報告することで、日本語教育史研究のアウトリーチ活動を行う。

3. 研究の方法

- (1) 文献、各種資料を通じて世界各地の日本語教育が、どのような視点から語られてきたか、全体像を把握する。その上で特に重要と思われるテーマを地域毎に選定し、そのテーマについて調べるための資料情報も紹介する。
- (2) 上記のリソースを3つの異なる授業で用い、その実践について国内外で発表し、内容は随時更新する。
- (3) 上記(1)(2)の内容を日本語、英語、中国語の三言語で、ウェブ上に公開する。

4. 研究成果

国際文化交流の一翼を担う日本語教育は、豊富な経験を活かしてグローバル社会の発展に貢献できる分野である。日本語教育の分野がその機能を果たすには、自らの歴史過程を学び多様な事例の中で複眼的に時代を把握する力を養う科目の果たす役割は大きい。しかし、現在、日本語教育学において日本語教育史を扱う意義が共有されているとはいいがたい。たとえば、日本語教育関連の学会や研究会の掲載論文や発表題目、『新版日本語教育事典』(2005年、日本語教育学会編)の項目、日本語教育課程における開講科目を見れば一目瞭然である。一方、「日本語教員養成において必要とされている教育内容」(『日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議報告』2000年、別添資料、文化庁)に示されたガイドラインでは、3領域5区分のうち、社会・文化・地域の区分の一つとして、「日本語教育の歴史と現状」が示されている。しかしながら、こうした現状を生んだのは、日本語教育学が新しい学問であることに加え、地域や時代を超えて日本語教育の全体像が概観できる教科書となりうる書籍や、研究の手法についての情報が不足していることにあると思われる。特に、歴史研究は、資料のデジタル化が飛躍的に進み、新たな成果が次々と報告されている。すなわち、最新の研究成果を紹介しつつ、随時更新していくために、まずは、日本語教育の歴史を扱う研究情報のリソース集を作成し、ウェブ上

で公開することが急務であると考えた。こうした趣旨で行ったプロジェクトが、JSPS 科研費基盤研究 (C)『日本語教育史のコンテンツの再構成と史料公開に関する基礎的研究』(課題番号 24520572)である。この成果として、1945 年以前の日本語教育の展開に関する情報を日本語、英語、中国語の三言語で公開することができた。

今回は、それに続くものとして、1946 年以降に関し、上記、3. 研究の方法 (1) により研究情報のリソースを構築した。構成は次のとおりである。国内 東アジア 東南・南アジア 欧州・ロシア・中央アジア 南北アメリカ・オセアニア 中東・アフリカ の地域を分け、それぞれの地域に 6 ~ 12 点の「課題」と、「文献」として 2 ~ 8 点の先行研究や資料を紹介した。「文献」以外の内容は、英語版と中国語版を作成し、海外の日本研究機関にも発信した。

筆者は、日本語教育の歴史をテーマとした授業を毎年三つの教育課程で行った。その際、特に共有すべき内容の課題発表は、ウェブサイトの「課題発表の例」に公開することを予め伝えた。以下に、専門課程 (学部・大学院) と一般課程 (学部) の授業実践において観察された成果と、国内外での発表を通じて得た成果についてまとめる。

(1) 日本語教員の養成を目的とした授業での実践

科目の位置づけ

一般に、教員採用試験では、教育史の問題は教育哲学や思想関係と同様に功績を残した学者や教育者、その著作、法令名などの知識を問うものが目立ち、採用試験に関知しない教育史科目を教職専門科目として維持することは容易なことではないと言われる。検定試験準備という点では日本語教員の養成においても同様のことが言える。

一方、学問という点からいえば、各学問は、学史のほか経済史、建築史、文学史などの科目が確立している。しかしながら、日本語教育が学問として研究されるようになった歴史は新しく、これらのガイドラインが確立しているとは言い難い。また、検定試験における教育史は、人物や書名などの暗記物と見なされる傾向にあり、本来の日本語教育史の研究が等閑視される事態になったと考える。しかし、複雑に交錯し新たに生まれ続ける教育現場の諸問題に対し、解決策を導き出していくには、根源的な問題を考える場を経験しておくことは重要である。先人が刻んできた歩みを辿り多様な事例に触れることは、複眼的に時代を把握し、現代の課題を相対化し方策を探る上で役に立つ。

具体的な方策と大学院での実践

特に大学院の授業では、留学生比率が高く、異なる歴史背景を持つ学生がともに学ぶことを想定する必要がある。前科研から引き継いだ方法、すなわち、受講生が各自の関心に沿ってテーマを選択、先行研究を読み解き、自律的に取り組むという方法は、効果的であった。(具体的には、研究テーマ、参考文献として先行研究や資料等の情報を「課題と文献」「デジタルアーカイブ」という項目にまとめ、「課題と文献」を辿ることで各時代の日本語教育の展開や研究の動向についても俯瞰できるよう、構成を考えた。)特に、歴史資料にウェブ上で触れる機会を得たことは、これまで歴史に対する関心の薄かった受講生の史実への関心を喚起し、研究の萌芽を育むことにつながった。この 3 年間に、受講生 (大学院生) が授業で発表した課題を発展させ、学外で口頭発表を行った件数は、把握している範囲では、国内外ですでに 8 件 (もともと当領域での研究を目的とする者は除く) にのぼる。

(2) 全学授業での実践

全学授業では、理系文系を問わず、「国際理解」「日本語」「歴史」というキーワードで集まり、受講生のほとんどは日本語教育に関する知識がない。高校までの歴史の基本的な知識を活かし、日本の対外交渉史を支えた人々、すなわち、諸外国の対日交渉に於ける日本語通訳者の存在やその学習方法に着目を促した。現代とは異なる日本語学習の目的や学び方、外国語を身につけたことによる人生の変化等に関心が集まり、議論は、自らの外国語学習との対照や外国語学習の意義に向かうことが多かった。

授業では、講義やウェブサイトを利用した二回の発表のほか、関連テーマの DVD を視聴し、ゲストスピーカーから諸外国の日本語教育事情を聞くことにより、海外の日本語教育に関心をもつ者も現れ、うち一名は日本語教育の補佐を目的に短期留学を決めている。

(3) 実践に関する報告・口頭発表の成果

ウェブサイトの内容や実践に関し、国内外での学会や研究会、講演で紹介した。この機会を通じ、参加者や関係者から、資料や素材があるがどのようにまとめたらよいかを知りたい、という問い合わせが複数件あった。すなわち、実際に当領域への関心は低いわけではなく、こうした発表を継続することで、足跡を辿ることの意義が共有される可能性は十分にあり、独自に記述を試みたいというニーズも存在することが確認できた。同時に、その手法に関する情報を共有するには、授業のみでなく、研究会等を通じて発信していく必要性を痛感した。こうした声を参考に、ウェブサイトの内容を今後も随時更新していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

海外の日本語教師と学習者の活動に関する一考察ー北欧フィンランドの事例から(査読無)
小川 誉子美 単著
『日本語教育連絡会議論文集』31号 日本語教育連絡会議事務局 pp.93-101 2019年03月

日本語を教える意味を戦前・戦中の在欧日本人講師の声にたどる(査読有)
小川 誉子美 単著
『ヨーロッパ日本語教育』22号 pp.437-442 ヨーロッパ日本語教師会 2018年04月

日本語教育のルーツをたどる ウェブサイトで学ぶ日本語教育史 (査読無)
小川 誉子美 単著
『日本語教育連絡会議論文集』30号 日本語教育連絡会議事務局 pp.27-36 2018年03月

「日本語教育史の意義と可能性：授業実践と研究リソースの構築を踏まえて」(査読無)
小川 誉子美 単著
『外语专业建设与人文精神培养 2』大连理工大学出版社 pp.1-10, 2017年12月

〔学会発表〕(計 7件)

日本におけるフィンランド 1950年代を中心に
小川 誉子美
Suomen ja Japanin diplomaattisuhteiden 100-vuotisjuhlaseminaari (フィンランド、ヘルシンキ大学) 2019年05月 ヘルシンキ大学東アジア協会

在欧日本語講師の一側面：帰国後の活動の注目して
小川 誉子美
第31回日本語教育連絡会議 (クロアチア、ユリアドリブラ大学プーラ) 2018年08月

日本語を教える意味を戦前の在欧日本人講師の声にたどる
小川 誉子美
第21回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (ポルトガル、新リスボン大学) 2017年09月
ヨーロッパ日本語教師会・ヨーロッパ日本研究者会議(共催)

日本語教育のルーツをたどる ウェブサイトで学ぶ日本語教育史
小川 誉子美
第30回日本語教育連絡会議 (ドイツ、オルデンブルグフォルクスシュレー) 2017年08月

北欧文化協会創設者桑木務と戦前ヨーロッパの日本語・日本文化講座
小川 誉子美
北欧文化協会月例会 (京橋プラザ区民館) 2017年11月

「日本の技術書輸出第一号」を手掛けた訳者たち
小川 誉子美
総合学術学会 2016年度秋季大会 (東京工業大学CIC) 2016年12月

「日本語教育学研究の最前線」
小川 誉子美
語言学院講演会(中国、華東師範大学) 2018年3月

〔図書〕(計 3件)

日本におけるフィンランドの紹介ー戦後20年間の活動内容と意義
小川 誉子美
『日本とフィンランドの出会いとつながり』大学教育出版 pp.171-184 2019年05月

Suomea tunnetuksi tehneet japanilaiset oppilaineen kahdella sodanjälkeisellä vuosikymmenellä

Yoshimi OGAWA

Suomi ja Japani. Kaukaiset mutta läheiset, Edita, pp.164-177 2019年04月

A Korean who taught Japanese in 1930s Vienna:Do Cyong-ho (ToYu-ho) based on Finnish and Japanese sources

Yoshimi OGAWA, Chikako SHIGEMORI BUCAR (共著)

Koreans in Central Europe To Yu-ho, Han Hung-su, and Others pp.33-44 2018年08月

〔その他〕

ホームページ等 「ようこそ！日本語学習、教育史のホームページへ」

<https://ynu-isc-kokusai.jimdo.com/>

6. 研究組織

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：小山騰

ローマ字氏名：(KOYAMA, Noboru)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。